國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

植民地期台湾におけるオノマトペの諸相：『全国小学児童綴方展覧会』採録「綴方」を対象として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-26 キーワード (Ja): 植民地期台湾, オノマトペ, 『全国小学児童綴方展覧会』, 日本語教育史, 日本語非母語話者 キーワード (En): 作成者: 上出, 大河 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000098

植民地期台湾におけるオノマトペの諸相

―『全国小学児童綴方展覧会』採録「綴方」を対象として―

上出大河

【キーワード】植民地期台湾　オノマトペ　『全国小学児童綴方展覧会』　日本語教育史　日本語非母語話者

1.　はじめに

諸言語との比較において、日本語が韓国語と並んでオノマトペのヴァリエーションに富んだ言語であることは広く知られた事実[1]であり、この点については贅言を要しないであろう。

伝統的な言語学的研究でオノマトペに関する研究が中心的な関心を集めることは僅少であり、この分野における研究が進展したのは近年であった。これは、オノマトペがその性質上感覚性に関わる表現であることや、日常的、卑俗的で格式の低い表現と見なされてきたこととの関連が認められるが、非母語話者の日本語習得について考えれば、むしろそれゆえにオノマトペは重大な学習項目であると位置づけることも可能であろう。

このような非母語話者のオノマトペ習得に関する研究は、後に少しく紹介するが既に複数の成果が発表されている。他方、それらはいずれも＜いま・ここ＞（現代日本）あるいは＜いま・そこ＞（現代他国）における状況を記述するに留まっていると言わざるを得ず、＜むかし・ここ＞あるいは＜むかし・そこ＞の非母語話者によるオノマトペの使用は残念ながら検討の対象とされることが僅かであった。そこで本稿では、植民地期台湾[2]におけるオノマトペの使用状況等について『全国小学児童綴方展覧会』採録「綴方」を対象に調査を行い、調査報告として非母語話者とオノマトペとの関係の史的側面の一端を記述することを目指すこととする。なお、資料として『全国小学児童綴方展覧会』を用いるのは、作文教育史における当時の「綴方」思想に、生徒の主体性を尊重するという性質が認められ、その点で本資料が児童の言語運用の実態をある程度反映していると期待されるためである。

2.　先行研究

2.1　定義及び分類をめぐって

オノマトペの定義や分類については様々であるが、以下に代表的なものについて概略的に述べる。

実際に何らかの音が可聴的に現れたものを字句によって模倣したものを「擬音語」、状態や感覚等実質的には非可聴的な性質のものを字句によって模倣したものを「擬態語」と分類するのがもっともシンプルでオーソドックスな分類と言えよう。また、擬態語の下位区分として感情を表す「擬情語」、外形的なありさまを表す「擬容語」等を設ける場合も多いが、これらの分類の基準は必ずしも明示的ではなく[3]、分類を行う者によって恣意的な判断がなされることも少なくない。さらに、徐(2010)が擬音語及び擬態語を和語的(狭義)と漢語系(広義)に分類することを提唱した例や吉永(2015)が統語的性質から擬態語を 4 種に分類することを提唱した例等、論者によってこれまで様々な分類が試みられている。

各論による多様な分類はそれぞれの設定課題に対する緻密な調査を可能としている。しかし、本稿はこれまであまり目が向けられなかった植民地期台湾におけるオノマトペの実態について実際に使われていた用例の列挙や内地人、本島人[4]との数量的な比較を主眼とするため、さしあたって便宜的に簡略的な分類を設定し、「擬音語」、「擬容語」、「擬情語」の三分類を適用することとしたい。

2.2　日本語非母語話者とオノマトペ

オノマトペに関わる研究は学際的に発展しており、それらを網羅的に紹介するのは紙面の都合もあり困難を極める。また、研究史的な紹介を行うにも、重要な研究課題として認知されたのが近年であるとはいえ、Ferdinand de Saussure が『一般言語学講義』で言語記号の恣意性の例外としてオノマトペに言及している例等、音象徴に関わる諸研究も含めてどこまでを振り返るのか悩ましい面がある。そのため、ここでは便宜的に日本語教育とオノマトペに関する先行研究について少しく述べることとしたい。

オノマトペが非母語話者にとって習得困難であることについて言及した先行研究は、張(1989)、金(1989)、有賀(2007)、徐(2010)等多数である。徐(2010：1)は「日本語学習と日本語教育の経験が豊富な人なら分かるように、日本語の擬音語と擬態語は決して無視できない難点の 1 つである」と述べ、日本語教育、学習に関わる人々にとってオノマトペの習得の困難であることは周知の問題とする立場を表明している。しかしその一方で、阿刀田ら(1989：30)は「日本語指導の現状においては、ことに初級段階では音象徴語は指導項目の枠組みに位置づけられていないように思う。たまたま取り上げられる場合にもその特殊性―というより遊戯性を強調したり演出したりして紹介されることが多く、教材としての本格的な取り組みがおろそかにされているきらいがある。」と指摘しており、他の文法項目等と比較してオノマトペに関する指導は希薄であるという日本語教育の問題点について述べている。これは論文発表時(1989 年)の指摘であるため、現状は必ずしもこのような指摘と一致するわけではないが、教科書等における記述としては未だこのような現状が充分に改善されているとは言い難いであろう。

また、玉村(1998：34－35)は日本語学習者がオノマトペの習得を目指す際に困難が生じる要因として、⑴語数が多いこと、⑵類似語形(ヴァリアント)が多いこと、⑶語形と語義の理解、把握が容易でないこと、⑷辞書に採録されていないものが多いこと、といった 4 点を挙げている。これらの要因は当然ながら植民地期台湾における本島人児童にも当てはまるため、植民地

期台湾における本島人児童も類似の学習上の困難を抱えていた可能性については想像に難くない。

本稿では次章から、内地人児童とのオノマトペ使用の質的、量的な差異からこのような傾向が植民地期台湾でも確認されるか否かについて調査を行う。

3. 『全国小学児童綴方展覧会』におけるオノマトペ

3.1 調査対象について

調査対象とした『全国小学児童綴方展覧会』[5]は全国小学児童綴方展覧会事務所によって1936年に発刊された書籍である。同書には、1935年10月から翌1936年3月までの間に募集された全国の児童の「綴方」が採録されており、その中には台湾や朝鮮といった所謂「外地」の児童の「綴方」も含まれている。

本稿では小学一年生児童から高等小学二年生児童までの内地系、本島系児童の「綴方」に見られるオノマトペを調査、分析することとする。内地系、本島系の区別については氏名によって行われたものである。また印刷上の不具合等のため読み取りが不能となっている箇所については調査対象からはずれている。

採録「綴方」数は、表1にまとめた通りである。

以下、尋常小学校1年生児童～6年生児童を「尋1」「尋2」等と表記し、高等小学校1、2年生児童を「高1」「高2」と表記する。

表1 『全国小学児童展覧会』採録「綴方」数(単位：本)

	尋1	尋2	尋3	尋4	尋5	尋6	高1	高2
内地系	10	13	21	26	24	12	1	0
本島系	5	20	16	30	36	35	7	5

尋1と尋3では内地系児童の採録数が優勢であり、逆にそれ以外は本島系児童の採録数が優勢になっている。

3.2 オノマトペの出現数

調査対象となった内地系、本島系児童の「綴方」中に見られるオノマトペをその数量という観点で見ると以下図1のようになる。なお、ここにおける出現数は同一語形が複数回確認されたものも含み、延べ語数的にカウントされたものである。

また、「しみじみ」、「つくづく」のようにオノマトペとして認識しうるか否か悩ましい例も存在するが、このような例については小野編(2003)の分類を参考にする。それでもなお幾例かは判別困難であり、その点は稿者の判断によるものである。

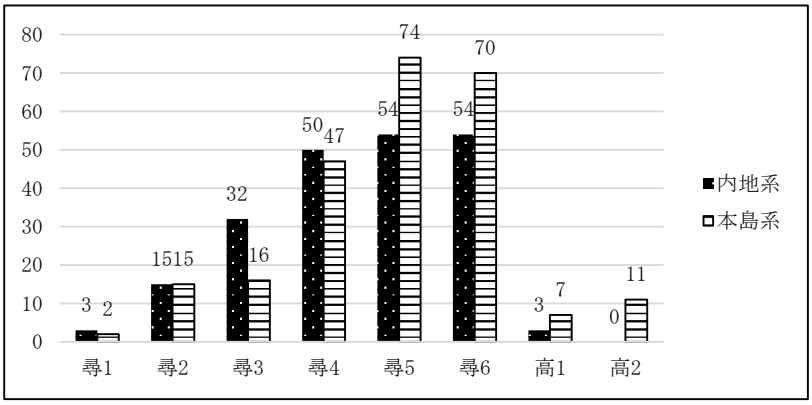


図１　『全国小学児童綴方展覧会』各巻に見えるオノマトペ数

しかし、上記したような数値は表 1 で示したような『全国小学児童綴方展覧会』における各学年の内地系児童、本島系児童の採録本数の偏りが考慮されていないため、この数値を見ただけではオノマトペ使用の量的な単純比較を行うことは困難である。

そのため、以下図 2 に児童の採録「綴方」一本あたりにどの程度のオノマトペ使用が確認されるのかについて示す[(6)]。

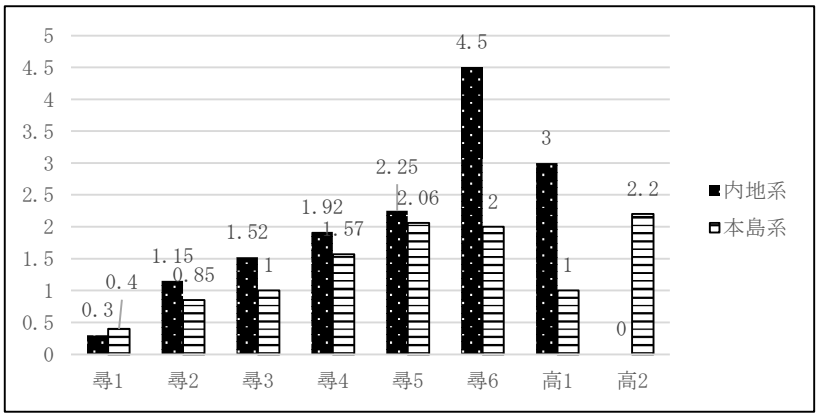


図２　採録「綴方」一本あたりのオノマトペ使用回数（単位：回）

「綴方」一本あたりのオノマトペ使用回数という観点で見れば、尋 1 と高 2 を除く全ての学年で内地系児童のオノマトペ使用回数が本島系児童の使用回数を上回っている。

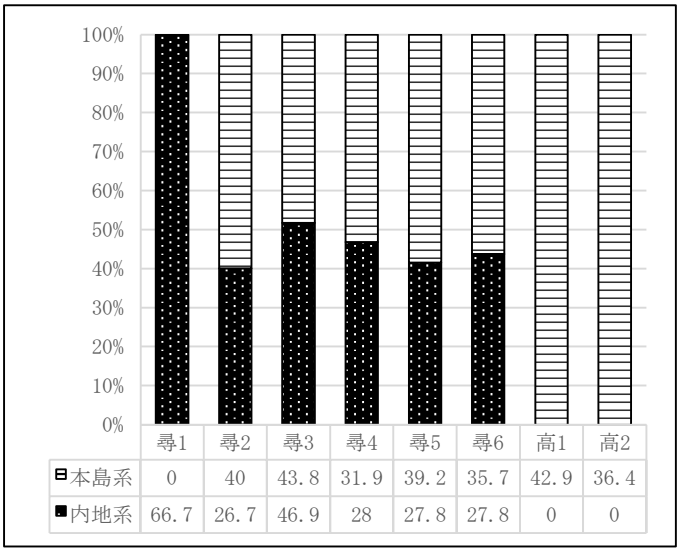
また、例外的に本島系児童の使用回数が内地系児童の使用回数を上回った尋 1、高 2 はそもそも調査対象となった本数が他の学年と比較して僅少であるため、この点が要因となって一本あたりの使用回数に影響を与えている可能性が否定できない。（内地系児童の使用回数が上回っているものの同様の要因で高 1 の使用回数にも疑義が残る。）

このような例外をどのように処理するかという問題や一本当たりの作文の字数、語数のばら

つきといった問題は残るが、多くの学年で内地系児童のオノマトペ使用回数が本島系児童を上回るという結果は、植民地期台湾においても現代の日本語学習者の例と同様に、本来非母語話者である本島系児童のオノマトペ習得には一定の困難があったことが推測される。

3.3　オノマトペ使用の質的な検討

前節においては『全国小学児童綴方展覧会』に見えるオノマトペの数量について示したが、既に述べた通りオノマトペはその質的差異によって分類が可能である。以下図 3，4，5 では、「擬音語」、「擬容語」、「擬情語」の三分類から各学年のオノマトペを分類し、使用されたオノマトペ全体に占める各種のパーセンテージを内地系児童と本島系児童との比較という形で提示する。



	尋1	尋2	尋3	尋4	尋5	尋6	高1	高2
本島系	0	40	43.8	31.9	39.2	35.7	42.9	36.4
内地系	66.7	26.7	46.9	28	27.8	27.8	0	0

図 3　擬音語（単位：%）

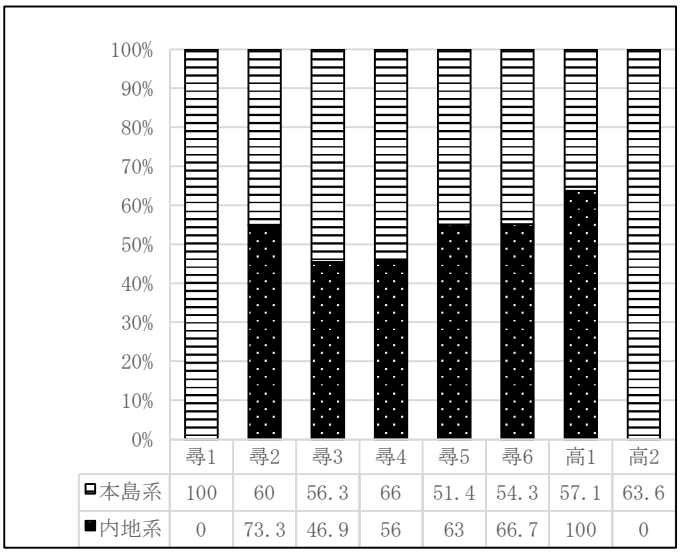


図 4　擬容語（単位：%）

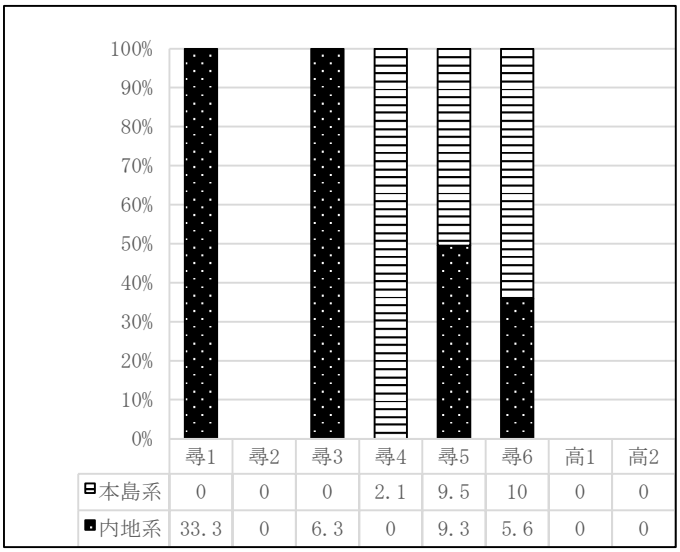


図 5　擬情語（単位：%）

図 3，4，5 に示した結果を大まかにまとめると、各学年で多く用いられる種類にはばらつきこそ認められるものの、全体を通して「擬音語」、「擬容語」、「擬情語」という種別の使用傾向に内地系、本島系の間で明確な差異は認め難い、ということになる。

例えば、尋 1 及び尋 3、尋 4、高 2 では本島系児童の擬容語使用率が内地系児童のそれを上回っているが、それ以外の学年では逆転している。このような使用率の差異が低学年と高学年の

差異と捉えうるような学年で確認されたとすれば、学習初期段階では本島系児童は可聴的な音声（あるいは非可聴的、概念的な感覚）を模倣して文字化することに困難を感じていた（あるいは感じていなかった）のではないか、と考えることもできよう。しかしここに見られるような使用率の差異は内地系、本島系ともに学年ごとに不規則な変化が見られるため、むしろこれは採録された「綴方」の文章上の要請等によって生じた差異であって、言語運用能力の差異と認めないのが自然である。

前節における使用回数の平均値を踏まえれば、内地系児童と比較して本島系児童のオノマトペ運用能力は低かったものと捉えられるが、一方で本節における調査結果を考慮すれば、擬音語や擬容語といったある特定の種類のオノマトペの学習が困難であったわけではないということが分かる。現代台湾系学習者の各種別のオノマトペの学習の難易度について実定的なデータを示した先行研究は管見の限り存在しないようであるため、現代の台湾系学習者に関して断定的なことは述べられないが、植民地期台湾においては学習者の使用上の困難が見られるものの、改正台湾教育令施行後の教育現場での内台融合の結果、種別の分布という点ではあまり差異が生じなくなったと推測される。

3.4　同一語形出現数上位の語

オノマトペの使用率及び各種の分布については前々前節及び前節で述べた。『全国小学児童綴方展覧会』採録「綴方」中に見られるオノマトペには同一語形のものが複数回確認されるものも存在する。出現数上位のオノマトペはそれだけ使用者にとって日常的で重要性の高いオノマトペである可能性が高いため、以下に内地系児童、本島系児童それぞれの同一語形出現数上位のオノマトペと、同率を含めその上位 3 位までの用例を二例ずつ提示したい。

なお、平仮名、片仮名といった表記上の差異の処理についてはいくぶんかの議論の余地が残るが、矢口（2012）がオノマトペの喚起する語感イメージが表記形態によって異なるということを報告している例を踏まえ、ここでは同一語と見られる場合にも平仮名と片仮名、あるいは仮名遣いといった点でその表記が異なる場合には別語として集計している。

表 2　内地系児童によるオノマトペ出現数上位の語

出現語形	出現回数
にこにこ	11
びくびく	6
きらきら	4
どきどき	4
ひらひら	4
じつ(と)	4
ちよこちよこ	3

どん	3
くすくす	3
ぐるぐる	3
そうつ(と)	3

「にこにこ」
(1)「山田さんも妹たちもきれいな着物を着てにこにこ笑つてゐました」(尋 5)
(2)「今まで心配していられた母もにこにこだつた」(尋 6)

「びくびく」
(3)「私はびくびくしながら出て行きますと、近所のをぢさんでした」(尋 4)
(4)「びくびくしながら食べやうとしても、やはりする」(尋 5)

「きらきら」
(5)「まんまるい大きなお日様が大武山の真上にのぼつてきらきらかがやいてゐた」(尋 4)
(6)「しめつたはつぱの緑色なのが、朝日にてらされてきらきらと光る」(尋 5)

「どきどき」
(7)「私にはますます胸がどきどきしました」(尋 4)
(8)「むねはどきどきをやめてくれませんでした」(尋 4)

「ひらひら」
(9)「ひらひらと国旗が空に高く立つてゐました」(尋 5)
(10)「私は振袖をひらひらさせて町を悠々と歩いていた」(尋 6)

「じつ(と)」
(11)「かつてゐる人が『にげたらかむよ』といつたのでじつとしてゐた」(尋 4)
(12)「生意気に目をつぶつて、じつと考へこんだ」(尋 6)

表 3　本島系児童によるオノマトペ出現数上位の語

出現語形	出現回数
にこにこ	8
ぴよぴよ	5
パン	5
ぢつ(と)	4

わいわい	4
どきどき	4
じつ(と)	3
どん	3
ぶるぶる	3
びくびく	3
いらいら	3
ばたばた	3
しとしと	3
ずんずん	3

「にこにこ」
(13)「事む室の前には先生がにこにこしてゐられます」(尋 3)
(14)「お母さんが弟をつれてにこにこしながらお帰りになりました」(尋 4)

「ぴよぴよ」
(15)「一羽のひよこがひあたりのよいかきねの下で、ぴよぴよと鳴きながら」(尋 4)
(16)「二三日前に生れたヒヨコがかなしさうにぴよぴよと親を探している」(尋 4)

「パン」
(17)「用意―パン―パン」(尋 5)
(18)「用意―パン」(尋 5)

「ぢつ(と)」
(19)「くもは身うごきもせず、ぢつとその虫を見てゐましたが」(尋 4)
(20)「お祖母様は目をひらいてぢつと私を見て居られたが」(尋 5)

「わいわい」
(21)「先生をとりまいて、皆がわいわい騒いでゐる」(尋 6)
(22)「友達は見物に行く事をわいわいとさわいでゐるが」(高 1)

「どきどき」
(23)「朝から胸がどきどきする」(尋 5)
(24)「私はタイムをはかる度に胸がどきどきしました」(尋 6)

内地系、本島系児童共に最高出現数を記録したオノマトペは「にこにこ」であり、この語が植民地期台湾における基礎的なオノマトペであったことがうかがえる。

また、本島系児童の出現数第二位のオノマトペ「ぴよぴよ」などは、「あひる」の鳴き声を模倣したものであり、本島系児童の生活様式に「あひる」が密接な関係を有してたこと等、言語的な性質以外の要素を見て取ることができる。

これら出現数上位のオノマトペをその語形パターンで分類する。試みに吉永（2019）の分類方法を参考に分類すれば、内地系では 48 例中、XYXY 型が 35 例、X ッ型が 7 例、X ン型、XY ッ型がそれぞれ 3 例ずつであった。本島系では 54 例中、XYXY 型が 36 例、X ン型が 8 例、X ッ型が 7 例、X ン X ン型が 3 例であり、XY ッ型、X ン X ン型の使用の有無といった差異は認められるものの、語形上の分類から見ても、重大な差異は認められない。

4.　まとめ

以上、『全国小学児童綴方展覧会』採録「綴方」を調査対象として植民地期台湾におけるオノマトペについて簡略的に記述してきた。

調査結果を見れば、「綴方」一本あたりのオノマトペ使用回数という点では多くの学年で内地系が本島系を上回っており、先行研究で指摘されてきた日本語非母語話者のオノマトペ学習の困難が植民地期台湾でも同様に存在していたことがうかがえる。しかし、各種オノマトペの内容的分類、語形パターン上の分類という観点では大幅な差異が認められず、そのような学習上の困難はオノマトペ使用の質的な差異としては表出していない。

今後は、このような結果の生起要因としての教科書の語彙の調査や、他の領有地における用例との対照を進めることで、さらに非母語話者のオノマトペ使用の史的な究明を進めることを稿者の今日的課題として取り組みたい。

注

(1)　一例を挙げれば、「日本音響学会誌」54 巻 3 号(1998)における田守育啓の「日本語は他の言語と比べるとオノマトペに富んだ言語であるとよく言われる」(p 215)なる見解が象徴的であろう。

(2)　台湾においては 1922 年の改正台湾教育令によって内地人と本島人の共学が認められて以降、少なくとも原則上は教育における「内台融合」が図られていた。

(3)　この点については小野正弘編(2007)『擬音語擬態語 4500　日本語オノマトペ辞典』、小学館、212 頁でも言及がある。

(4)　植民地期台湾において特に行政事務は、日本語母語で台湾在住の内地出身者（大和民族を中心として元来日本国の領土に居住していた人々であるが、諸事情により当時台湾に居住していた人々が中心となる）を「内地人」と呼称し、閩南語や客家語を母語とする台湾ルーツの人々を「本島人」と呼称した。

(5)　調査には国立国会図書館デジタルコレクション（https://dl.ndl.go.jp/）を活用した。

(6)　いずれも小数第二位以下繰り上げで算出。以下すべての計算に適応する。

参考文献

(1) 阿刀田 稔子、星野 和子(1989)「日本語教材としての音象徴語」、「日本語教育」68、pp33-40

(2) 有賀千佳子 (2007)「オノマトペを通して、語彙の学習・教育について考える」、「日本語学」(7)、pp65-73

(3) 小野正弘編(2007)『擬音語擬態語 4500　日本語オノマトペ辞典』、小学館

(4) 金慕箴 (1989)「中国における日本語の擬音語・擬態語の教育について」、「日本語教育」 68、pp83-98

(5) 徐一平 (2010)『日本語の擬音語・擬態語に関する研究』、学苑出版社

(6) 玉村文郎 (1989)「日本語の音象徴語の特徴とその教育」、「日本語教育」68、pp1-12

(7) 田守育啓(1998) 「日本語オノマトペ ： 多様な音と様態の表現」、「日本音響学会誌」54 巻 3 号 pp215-222

(8) 張麗群 (1989)「中国人から見た日本語の擬音語と擬態語」、「日本語教育」68、pp. 128-130

(9) 矢口幸康(2012)「テクスチャ―を表現するオノマトペの感覚関連性評定に表記形態が与える影響認知」、「読書科学」19、pp91-199

(10) 吉永尚 (2015)「心身の状況を表す擬態語動詞についての素性分析」、「園田学園女子大学論文集」第 50 号 pp21-28

(11) 吉永尚 (2019)「オノマトペの語形パターンに関する一考察」、「園田学園女子大学論文集」第 53 号 pp75-81

資料

(1) 全国小学児童綴方展覧会編(1936)『全国小学児童綴方展覧会』、全国小学児童綴方展覧会事務所

―国学院大学大学院博士課程後期―